

## 工事記録写真の撮り方

### A 留意事項

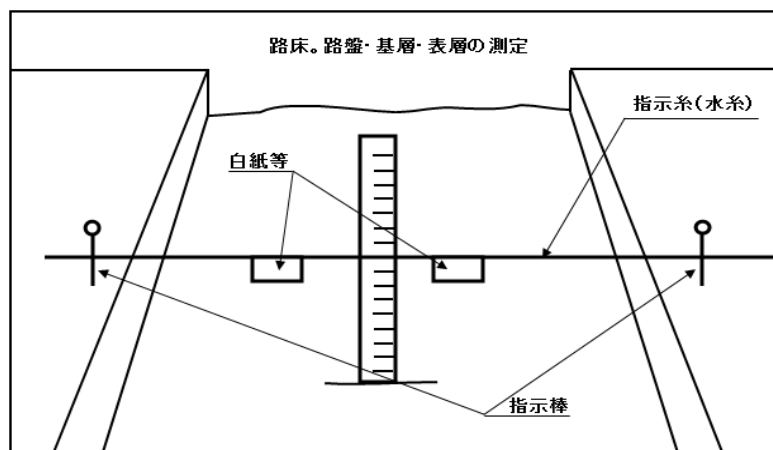
- 1 不可視となる出来形部分については、出来形寸法が確認できるよう、特に注意して撮影すること。
- 2 撮影箇所がわかりにくい場合には、写真と同時に説明図等を工事記録写真帳に添付すること。
- 3 継続的に、かつ、時期を逸しないように撮影すること。
- 4 黒板には、必ず撮影日を記入すること。  
必要に応じて立会者・検査職員等を記入すること。
- 5 夜間工事や暗部の撮影には、特に照明に注意し、鮮明な映像が得られるようにすること。
- 6 撮影はその点だけに集中せず、撮影地点が施工区間の中のどのような箇所であるかわかるように、できるだけ背景を入れて撮影すること。
- 7 必要に応じて設計値、実測値を黒板等で表示すること。
- 8 デジタル写真の場合、PC上で写真拡大により数値等を確認できるものは、拡大写真を省略できる。

### B 撮影の要点

- 1 施工区間の撮影  
施工区間の長い工種（路面復旧等）については、起終点及び中間点（複数点）を撮影する。

## 2 形状寸法の確認方法

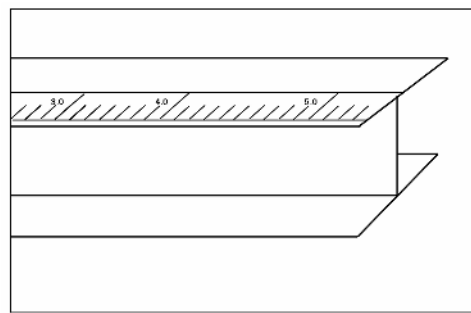
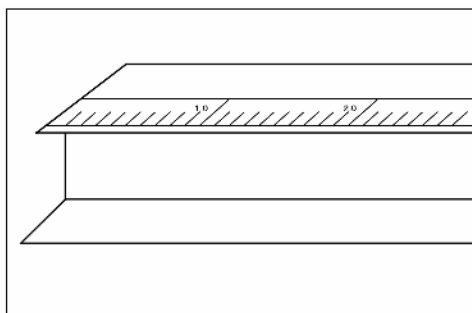
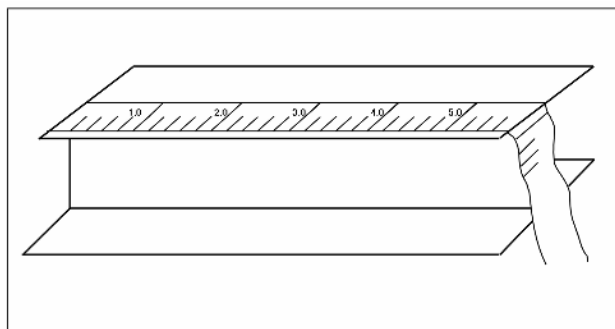
- ① 撮影にあたっては、付近を整理整頓して、形状寸法、位置等が判別できるように黒板と測定尺・スタッフ・リボンテープ等を目的物に添える。
- ② 測定尺・スタッフ・リボンテープ等を使用する場合、位置寸法が正確に確認できるように指示棒を添える。
- ③ 指示糸（水系）を曇りや夜間等に使用する場合は、糸が判別しにくいことがあるので、薄い白紙等を糸に掛けて高さを明示する。



## 3 撮影の方法

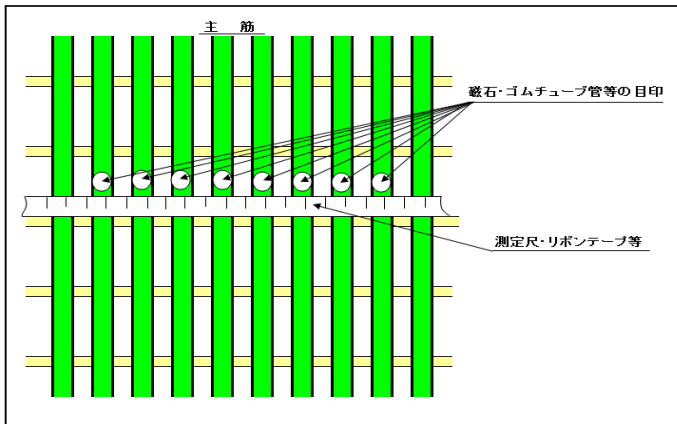
### 1) 長物（鋼材等）の撮影

長物の撮影の場合、全景写真では目盛が判読しにくい時は、全景撮影のあと両端部を拡大撮影する。

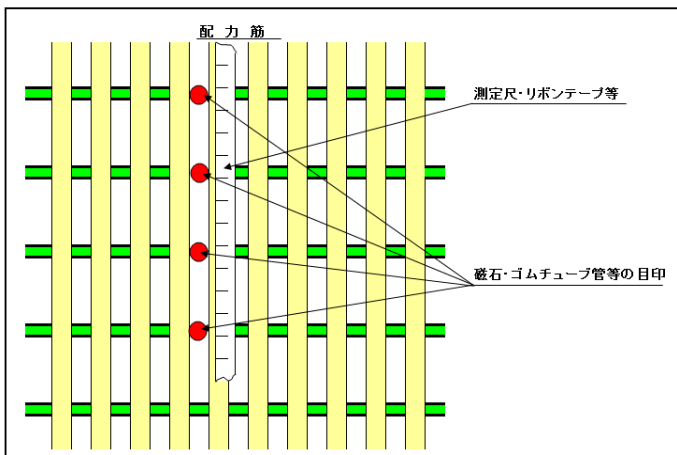


## 2) 鉄筋配筋間隔の撮影

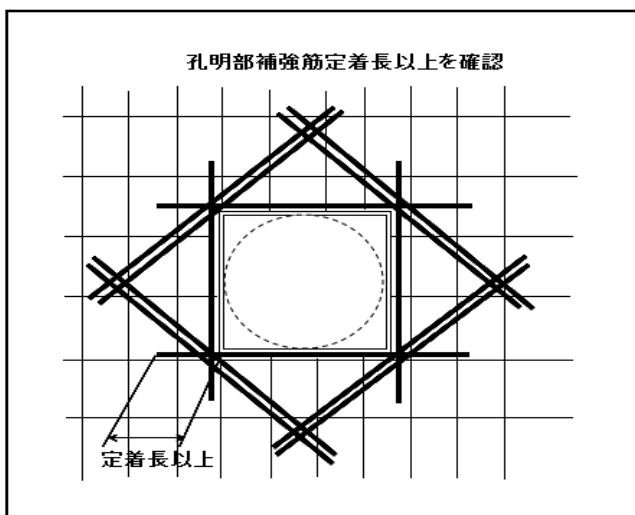
- ① 配筋間隔を撮影する場合、全景写真のみでは明確に確認できないので全景撮影のあとに拡大撮影をする。



- ② 主筋、配力筋等の配筋間隔を測定尺・スタッフ・リボンテープ等を当て、1 m範囲で確認する。



- ③ 主筋、配力筋等は、それぞれ色分けした磁石、ゴムチューブ管等で目印をする。(テープは後に残るので不可とする)



- ④ 継手箇所及びラップ長を撮ること。  
また、補強筋については、定着長以上の確認が出来るよう撮ること。

## 4 番号による表示

杭打の施工状況を撮影する場合には、杭番号を記入して建込み状況及び終了の状況が判別できるようにする。